

2020年東京五輪・パラリンピックを前に、大学がボランティアの通訳者養成に力を入れている。各地の外国語大学などがセミナーを行い、多くの学生らが参加。国内外のスポーツの大会で奮闘しながら本番に向けて腕を磨いている。

17年2月、アジア31カ国・地域から2千人超の選手らが集まった札幌冬季アジア大会。神田外語大学2年の本郷素直さん(20)はカタールの選手団約40人の英語通訳を務めた。通訳は本郷さんを含め2人だけで、案内や調整に駆け回った。

選手からは「すぐタクトを手配して」「ホッケーの装備は明日ホテルに運びたい」など関係者との調整が必要な注文が相次いだ。買い物に同行すれば「この弁当に豚は使われていないか」とイスラム教の戒律に関する質問も。当時1年生で外国人と接した経験が少ない本郷さんには「強烈な異文化体験だった」。

最初は聞き取れなかったが「やらなきゃと思う」と案外コミュニケーションがとれた。自信がついたし、英語をもっと勉強したくなった」。その後も様々なイベントに通訳として参加している。

挑戦のきっかけは「全国外大連合」の養成セミナーだった。同連合には神田外大のほか東京、関西、京都、神戸市、長崎、名古屋の各外国語大学が

五輪の夢舞台 活躍近し



全国外大連合の通訳養成セミナーで、パラリンピック競技のゴールボールを体験する学生ら(2017年9月、都内、写真上)世界少年野球大会で通訳を務める女子学生(同年8月、横浜市、同下)



外大連合、集中セミナー

加盟している。

17年9月に東京都内で開かれた3日間のプログラムには7大学の学生約350人が参加。通訳技のほかスポーツの社会的影響、茶道や三味線といった日本文化、サビース精神などを学び、パラリンピック競技のゴールボールも体験した。

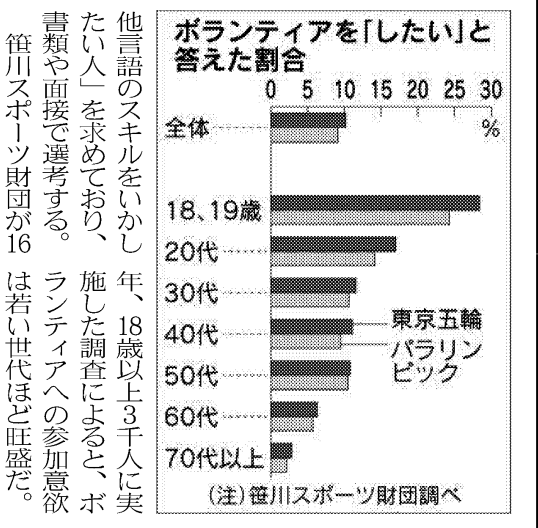
外大連合は15年以降、こうしたセミナーを計5回開催。修了者は「通訳バンク」に登録され、本

郷さんのように自主的にイベントに参加する。神田外大単独のケースも含め、この10年間で約130のイベントに延べ1千人以上を派遣した。

2月には初の海外イベント、平昌冬季五輪があり、2000人超の申し込みの中から選抜した語学堪能な約100人の学生を送る。約3週間の大会中、スキー、スケートなどの競技会場で世界各国から訪れた観客の誘導や

来る東京大会のボランティアは競技会場や選手村で働く「大会ボランティア」と駅周辺や観光地で案内をする「都市ボランティア」の2種類。大会組織委員会や東京都はともに2018年夏に募集を始める予定。他都市での募集分を含め9万人規模になる見込みだ。

東京大会9万人 今夏に募集開始



他言語のスキルをいかし、18歳以上3千人に実たい人」を求めている。年、18歳以上3千人に実書類や面接で選考する。ボランティアへの参加意欲は若い世代ほど旺盛だ。

上智大 市民向け講座も検討 亜細亜大 介助など多分野で

問い合わせに対応する。で韓国語を学ぶ長尾凜さん(22)。17年11月には「スポーツ通訳に興味があったし、学んだ語学を現場で生かしたかった」と話すのは神田外大の通訳を務め、審判

外国語を学ぶ学生が多。他大生も含めた15人上智大学も2017年9月、初めて通訳ボランティアの養成講座を開い

できる通訳講座の開催を検討する。企画を担当する師岡文男教授は「語学が得意な卒業生の人脈を生かし、東京五輪のボランティアに多くの人材を送り出したい」と言う。

通訳に限らず様々な形で手伝う「スポーツボランティア」を授業の一環で養成する大学も増加中だ。亜細亜大は同ボランティアの資格認定を行うNPOと連携。身体障害者の介助方法を学んだ

団や大会事務局との間を取り持った。「平昌では他の国のボランティアとの交流が楽しみ」と話す。事業を運営する神田外大の朴ジョンヨン専任講師は、通訳ボランティアについて「語学力を確認でき、責任ある立場で海外客やトップ選手と触れ合える。理想的な実践教育の場だ」と語る。「東京五輪では、もっと学生通訳の活動の輪を広げたい」

日本国内では訪日外国人の増加に加え、19年のラグビーワールドカップ(W杯)など世界的なスポーツイベントが目白押し。学生たちへの引き合いは一段と増えそうだ。

イアの養成講座を収録した映像教材を作り、他大や企業に無償で提供している。(伴正春)